

仏教説話にあらわれた寺院

— 今昔物語集を中心として —

一

信仰の実態を究明しようとするとき、信仰の形成される一つの場としての寺院に視点を置き、その寺院がどのように宗教的役割を果しているか、具体的にいえば、社会にどのようなうけとられていたかということに留意することも必要であろう。寺院の社会における存立状態は、建立者、建立目的によってそれぞれ異なるが、官大寺、御願寺、貴族の私寺といった様々の寺院の堂塔が、一般の人々の目にとどるような宗教的意味をもって映じていたのであるかということがある。このような点について考察しようとする時、恰好の史料として仏教説話が浮び上ってくる。説話は、社会の現実直視を基盤として成立し、語られ、伝えら

れてきたものであり、寺院の沿革、僧侶の伝記等の史実性に問題があるとしても、民衆社会に映じた寺院の姿を、如実に示しているとしてよからう。従っていま、特に寺院の登場することの多い仏教説話をとりあげ、それらに、どのような寺院があらわれ、どのような意味をもって語られているかを、仏教説話の一大集成である『今昔物語集』本朝部を中心に考究することとしたい。

まず、『今昔物語集』の説話に、どのような寺院が登場するかということであるが、総数一二カ寺を数えうる。いま、それらを列挙する紙幅もないが、地域的には陸奥から筑前に至るまで各地に互っており、時代的にもわが国仏教初伝時代から、本集編纂の時代に至るまでの各時代の寺院に及んでいる。しかし、考察の時代背景としては、説話

堅 田 修

の成立し語られている時代、凡そ平安初期から後期にかけての時代を想定して考察する。

二

『今昔物語集』において、寺院がどのようにあらわれているか、即ち寺院のどの点に関心がもたれて語られているかということについて先ず、見ていくこととしよう。

第一に挙げられるのは、例えば「聖武天皇始造東大寺語」という如くに寺院の草創、並びに再建縁起に関して語られているもので、卷十一の第十三話以降の東大寺、山階寺（興福寺）、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法華寺（本文闕）、法隆寺（本文闕）、四天王寺、本元興寺（飛鳥寺）、現光寺（比蘇寺）、久米寺、高野山、比叡山、楞嚴院、三井寺、志賀寺、笠置寺、長谷寺、清水寺、広隆寺（本文闕）、法輪寺（本文闕）、鞍馬寺、信貴寺、龍門寺（本文闕）、龍蓋寺の廿六カ寺の草創縁起譚、及び卷十二の第一話の越後国上山寺、第二話、遠江磐田寺の造塔靈驗譚、第廿、廿一話の薬師寺、山階寺の再建に関する靈驗譚等が、それである。計廿八カ寺が語られている。

次に、勤修される法会に関して語られている寺院がある。卷十二の第三話から第十話に至る説話がそれで、山階

寺の維摩会及び涅槃会、薬師寺の最勝会及び万燈会、東大寺の花厳会、比叡山の舍利会、石清水の放生会について語っている。計四カ寺が登場している。

次に、寺院に安置の仏像の靈異に関して寺院が語られている。例えば「女人仕清水観音・蒙利益語」という如くで、卷十六において、観音の靈驗に関し、清水寺（第九話ほか）、三井寺（第三話）、成合（相）寺（第四話）、殖槻寺（第八話）、穂積寺（第十話）、下毛野寺（第十一話）、珍努山寺（第十二話）、岡本寺（第十三話）、石山寺（第十八、廿二話）、長谷寺（第十九話ほか）、六角堂（第卅二話）、招提寺（第卅九話）、狭屋寺（第卅八話）の十三カ寺が登場している。

また、卷十七において地藏の靈驗に関して、土佐津寺（第六話）、播磨清水寺、近江崇福寺（第七）、陸奥小松寺（第八話）、祇陀林寺（第十話）、正法寺（第十二話）、伊豆地藏寺（第十六話）、東大寺（第十七話）、三井寺（第十九話）、播磨極楽寺（第廿話）、因幡国隆寺（第廿五話）、六波羅密寺（第廿八話）、陸奥恵日寺（第廿九話）、下野薬師寺（第卅話）の十四カ寺が見えている。さらに同巻には、虚空蔵ほか諸仏、諸菩薩の靈驗に関し、法輪寺（虚空蔵、第卅三話）、葛木尼寺（弥勒、第卅五話）、血渟山寺（吉祥天、第四十五話）、服部堂（吉祥天、第四十六話）、金鷲山寺（東大寺、執金剛神、第

四十九話)、元興寺(二天夜叉、第五十話)、卷十二に、鶴田寺(薬師、第十二話)、蓼原堂(薬師、第十九話)、大安寺(釈迦、第十五、十六話)、八多寺(阿弥陀、第十八話)、法成寺(大日、第廿二話)の十一カ寺が見える。以上、仏像の靈異に關し計三十八カ寺が語られている。

さらに、僧侶の行業に關して寺院が記されてもいる。例えば、「比叡山僧光日誦誦法花語」という如く、法華經誦持により靈驗を得た奇特僧、また、「元興寺智光頼光往生語」の如く、念仏往生、異相往生を遂げた僧侶について説話され、主題は僧の行業にあるのであるが、その僧の所屬、止住する寺院が、僧名に附随して出てくるという場合である。これは、卷十三、十五を中心として随所に、比叡山ほか五十三カ寺が見えるが、あまりに多数であるから寺名は略したい。

以上、『今昔物語集』における寺院のあらわれ方を通観したが、結局、縁起、即ち寺の歴史、法会、仏像、僧侶の各々に関心が向けられ語られているということであり、さらにいえば、最も数多く寺院が登場するのは、僧侶の行業に關してである。次いで多いのが仏像の靈驗に關してである。尚、『今昔物語集』において最も数多く登場する寺院は、比叡山であり、それは僧侶の行業に關してであるとい

うことを予め指摘しておこう。ところで、上述の如く寺院のあらわれ方を一応分類したが、これは必ずしも載然とわけて見られるわけではない。例えば、縁起に關して語られているといつても、縁起の内容は、仏像の靈驗を語つてもおり、また、仏像の靈驗に關してといつても、内容は、仏像に対する僧の帰依、信仰によって利益が与えられたという僧侶の行業に關してもおり、互いに関わりあっている。従つて、寺院の縁起、法会、仏像、僧侶のそれぞれについて語っている説話の内容について、さらに深く考察をめぐらせねばならない。

三

縁起に關して語られる寺院は、前述の如く廿八カ寺を数えるが、このうち、南都七大寺を始めとして、奈良朝創立の寺院が大半を占め、平安朝創立の寺は九カ寺である。一体どのようなことで、これら寺院の縁起に関心がもたれ説話されたのであろうか。これらが官大寺であり、何れも著名な寺院であることはいふまでもないが、いま、説話で語られているこれら寺院の縁起の内容を通覧して気付かれるのは、草創事情というより仏像の安置事情について語るか、草創の僧の高徳、奇特を語っているということであ

る。東大寺は大仏の塗金のことに關し、山階寺は、丈六釈迦像、脇侍二菩薩の造像に始るといひ、元興寺も金堂中尊の弥勒像造立奉安の由緒を語り、大安寺また丈六釈迦像造立についての夢想を、長谷寺、清水寺は十一面觀音、鞍馬寺は毗沙門天、信貴山は多門天の靈驗について語る等々である。また、比叡山は伝教大師、慈覺大師、三井寺は智証大師、高野山は弘法大師という高僧による草創を語っている。即ち、上述の寺々の縁起が説話されるのは、由緒、靈驗ある仏像の安置されている点、または高僧の創始されたという点において関心がもたれたためと考えられる。

『今昔物語集』の縁起説話は、各寺の先行縁起あるいは、『靈異記』、『三宝絵詞』等に原拠をもち相通するものが多いが、中には本元興寺縁起の如く改變、附加されているものもあり、さらに、平城元興寺縁起説話の如く、先行の縁起類に原拠を全く求め得ないものもあつて留意される。これについては後章に論考しよう。

法會に關し語られる寺院は、山階寺以下四カ寺であるが、『三宝絵詞』においては、三十一もの法會に關連する説話がみられた。そのうち、『今昔物語集』にうけつがれているのは、御齋會、薬師寺の最勝會、山階寺の維摩會の三勅會に、前述の山階寺涅槃會、薬師寺万燈會、東大寺花

嚴會、比叡山舍利會、石清水放生會の八會のみである。

『三宝絵詞』が、多くの仏事法會を掲げたのは、尊子内親王のために書かれたものといふことから、仏事法會にあけていた貴族社会にあつて、著名な法會、そして法會のいとなまれる寺院のあらましを、常識として知っておかねばならぬと考えられ、列挙解説されたものであつたと思われる。勿論、仏事法會が、貴族社会のみの関心に限られていたわけではないが、貴族たちにおいて、その関心がより強かつたといえよう。『今昔物語集』においては、一般社会を対象として説話が類聚されたと考えられるから、特に著名な法會以外の諸寺の法會を、とりあげなかつたものであらう。

『今昔物語集』においては、法會に關してよりも、安置の仏像の靈驗について寺院が語られることが多く見える。これは既に『靈異記』においても同様で、寺院が最も多く登場するのは、仏像の靈驗に關しての説話においてであつた。前述の如く、『今昔』において仏像靈驗を語る寺院は、三十八カ寺を数えるが、その中十五カ寺は、『靈異記』に既に見られたところである。靈異が語られる仏像のうち、最も多いのは、『靈異記』、『今昔』ともに觀音であり、『靈異記』においては廿話を数え、うち十一話が『今昔』

へ語りつがれている。『今昔』においては新たに、丹後の成相寺、京清水寺、六角堂、近江石山寺、三井寺、大和唐招提寺の各観音が登場し、特に長谷寺(六話)と清水寺(八話)に集中して語られている。観音信仰は、改めて申すまでもなく、既に奈良時代から盛んであったが、多くが観音一般に対する信仰であり、『靈異記』においても観音靈驗説話廿話のうち、安置する寺院を示すのは八カ寺にすぎず、他は何処の観音というのでなく観音一般の靈驗が語られている。ところが、平安中期に至って観音信仰の急激なたかまりをみることとなり、西国三十三所観音なども設定され、特定観音寺院への帰依参詣がなされてくる。『今昔』の観音説話は、このような事情を如実に示しているといえるが、観音寺院の地域的ひろがり、近畿を出ていない点は注意される。

観音に次いで地蔵の靈驗譚に関し、寺院が多く登場する。前掲の如く十四カ寺にのぼる。地蔵に関しては、『靈異記』、『三宝絵詞』には、未だ見えていない。地蔵信仰は、漸く平安中期に至って、罪障の自覚、地獄への恐怖を基礎として、弥陀信仰に附随、普及してくるのであり、それが『今昔』において如実に反映して語られてきているといえる。ここで注意されるのは、地蔵説話に出てくる寺院

十二カ寺のうち、八カ寺が近畿以外、即ち、土佐、播磨(二カ寺)、因幡、伊豆大嶋、下野、陸奥(二カ寺)の地方寺院であることであり、この点、前述の如く観音寺院が近畿地方に限られていたのと好対象を示している。地蔵信仰と観音信仰の質の違いを示しているとともに、地蔵信仰のひろがりの大であったことが知られる。

観音、地蔵のほか、さらに諸仏、諸菩薩、聖衆の靈驗が語られる中に、寺院がまた登場する。もっともこれらのうち、弥勒に関して葛木尼寺、吉祥天に関して血浄上山寺、服部堂、薬師に関して鶴田寺、蓼原堂、釈迦について大安寺、阿弥陀について八多寺、執金剛神に関して金鷲山寺等々は、既に『靈異記』において語られていたところである。『今昔』において、新たに登場するのは、虚空蔵の靈驗に関し法輪寺、大日如来供養における奇異に関し法成寺、二天夜叉の靈異に関し元興寺等である。ここで注意されるのは、弥勒に関し『靈異記』では葛木尼寺のほかに、貴志寺、弥気山室堂が語られていたのに、『今昔』では新たな弥勒寺院が登場するどころか、『靈異記』より少なくなっていること、また、薬師、釈迦の靈驗を新たに語る寺院が、『今昔』には出ていないこと、さらに、源信による浄土教興隆がなされているのに、阿弥陀信仰に関する寺院

が、『今昔』に見えないことなどである。弥勒信仰は、いうまでもなく既に奈良時代からかなり強く認められ、その後、平安中期に至って、弥勒信仰の高潮とともに、兜率天往生信仰も盛んとなるのである。従って弥勒信仰に関する寺院が登場してよい筈とも考えられる。しかし、弥勒にしろ、弥勒にしろ、その信仰は、その仏の靈驗が示されるのに對しての信仰ではなく、それぞれの浄土に往生せんとする信仰である。その仏に利益のあたえられんことを祈願するのでなく、浄土願生のために、弥勒及び弥勒を念じ、弥勒の名を、また弥勒の偈を唱するのである。民間では、特に

それらの像を造立するというのではなく、空也や歡喜に見られる如く、鼓を打ち偈を称し、あるいは金鼓錫杖をならし法螺を吹いての勸進に、人々はひき入れられ信仰したのである。従って、特定の弥勒像、弥勒像を安置した寺院を必要とするものでなかったわけで、説話にも念仏往生者は語られても、靈驗を示す弥勒、弥勒の寺院は、も早や登場しなくなったものと考えられる。『靈異記』にあらわれる弥勒信仰は盗まれて叫び声をあげて発見され、盗人が捕えられたとか(葛木尼寺)、蟻にかまれてうめき声をあげた(貴志寺、弥氣の山室堂)というものであり、また阿弥勒についても、一寡婦が落穂を拾って寄進した絵像が、盗人の放火

にも焼けなかったという異表を語るものであり、何れも平安時代の弥勒、弥勒信仰とは異質というべき信仰であった。また、釈迦、薬師の靈驗による寺院が新たにでてこないのも、それらに對する信仰が觀音、地藏にとって代われたことを如実に示しているものといえよう。

以上仏像の靈驗に関し、あらわれている寺院について考察したが、尚、ふかく究明すべき点が残されている。例えば、説話に語られる觀音、あるいは地藏信仰の内容について考察すべきであろう。平安中期頃からの觀音信仰は、旧来の現世利益的な域にとどまらず、苦海に溺れる五濁衆生の苦を代り受けるという觀音大悲に對する信仰となつていたといわれるが、『今昔』の説話にあらわれる觀音信仰はどうみることができるか。また、地藏六体を六道に配する六地藏信仰の始原ともみられる説話が『今昔』に見えているが(卷十七の廿三話)、さらに詳しく説話にあらわれる地藏信仰を究明しなければなるまい。しかし、説話にあらわれる寺院に主題をおくいまは、このような点の考察は後機に譲ることとしない。

仏像の靈驗に関して、かなり多くの寺院があらわれているが、それよりも『今昔』においては、靈驗、異表を示した奇特僧に関して語られる寺が最も多い。僧に関してあら

われるといっても、その僧の所属を示すために寺名が出るのであって、主題は僧、あるいは誦持する經の功德にある。しかし、その寺から、そのような奇特僧を出しているという点において、寺院の実態を伺い知られるであろう。このような奇特僧尼の説話は、『靈異記』において既に多く語られており（十七話）、『今昔物語集』にも、それらがうけつがれている。僧が誦持し靈異を示す經典としては、『靈異記』では法華經が十五話を数えるが、『今昔物語集』においても同様に法華持經による靈驗譚が、『靈異記』及び『法華驗記』からひかれ、併せて八十九話に及んでいる。法華經は奈良時代に護国の經典とされ、大いに尊重されたのであるが、また、この經を受持、誦誦、供養することによって、靈益をうけられるとして、持經することが行われ、『靈異記』にも語られているわけである。平安時代に至って法華經を中心經典とする天台宗の興隆にともない、法華持經は盛行する。持經者には一般俗人もあるが、多くは山林に隠遁し、練行苦修の上、民間に止住、遊歴するいわゆる聖とよばれる仏徒であり、彼らは私度、あるいは無戒の沙弥ばかりであったのでなく、得度、受戒の本寺をもつものであった。^⑧『靈異記』に見られる法華持經者は俗人が多く、僧では高麗寺榮常（中卷第十八）、海部峯山寺

大僧（下卷第六）、永興禪師師事の一禪師、及び吉野金峯山の二禪師（下卷第一）らにすぎない。しかし、『今昔物語集』においては、法華持經者は、所属並びに師弟關係を明示する僧が殆んどであり、中でも比叡山僧が甚だ多く、十三人を数える。その他、例えば、神明山寺睿実、四天王寺別当道命、定基、道公ら、三十一カ寺の僧の法華持經による靈驗譚が語られている。このように比叡山を始めとする諸寺院が持經者を輩出せしめていることは、平安時代後期におけるそれら寺院の宗教的機能の一斑を示しているといえるが、特に、比叡山が持經者を最も多く輩出していること、また、東大寺をはじめ、法隆寺、元興寺、大安寺、興福寺等の南都諸大寺からも出していることは留意してよい。次節で改めて考察しよう。

『今昔物語集』では、法華經以外の經典受持の靈驗譚も語られている。十七話あるが、うち七話は『靈異記』からの引用である。それらの説話に持經僧の寺として出てくるのは、心經受持僧義覺の難波百濟寺（卷十四、第卅三話）、金剛般若經受持僧長義の薬師寺（卷十四、第卅三話）、同じく金剛般若經による靈驗をえた宍濱の山崎相應寺、仁王經誦經僧の極楽寺、涅槃經供養の講師をつとめた源信僧都の比叡山横川等である。

上述の持経僧に關してと同様に、念仏往生、異相往生した僧の止住所として寺院が記されている。浄土思想の發達とともに、浄土往生が特に大きな関心をよび、往生人の行業が録されてくる。『日本往生極樂記』が、その先驅であるが、『今昔物語集』に見える往生譚は、殆んどが、『極樂記』及び『法華驗記』に依拠している。これら往生譚のうち、僧侶の往生については、卷十五の第一から第廿一話まで語られているが、それら往生僧の所屬、止住の寺として、比叡山が最も多く記されており、その他、元興寺、東大寺、薬師寺等の南都寺院、石山寺醍醐寺の真言寺院、梵釈寺、法広寺、如意寺、陸奥小松寺、信濃如法寺、摂津大日寺等が出ている。

四

以上、『今昔物語集』にあらわれる寺院が、縁起、法会、仏像、僧侶のそれぞれに關して語られている内容について考察してきた。要論すると、説話に寺院がとりあげられ語られるということは、第一に僧の行業、第二に仏像の靈驗とに關心がもたれた上であるといえる。僧に關してといつても、特に法華經受持僧、念仏往生僧に強く関心がもたれ、それにとりなつて、それらの僧の止住、所屬する寺

が語られるということであつた。また、仏像の靈驗に關してといつても、観音及び地藏に對する関心が主たるものであつたということである。このようなことは、『靈異記』にあらわれる寺院が、仏像の靈驗に關し最も多く登場しているのと好対象をなしている。従つて換言すれば、『今昔物語集』編纂の頃においては、法華經受持僧、念仏往生、異相往生僧を通じて、寺に對する関心がたかまつたともいえる。

ところで、僧侶の行業に關して、最も数多く登場するのが比叡山であるが、これについて、しばらく考察しよう。比叡山は、その殆んどが僧に關して出てくるのである。このことは比叡山の性格を如実に示しているといえる。比叡山は、いまでもなく、奈良時代官寺の如く、結構整備した大伽藍において鎮護國家を祈るという如きではなく、國寶、國師、國用となるべき僧を養成する修學の山林道場であり、仏像の靈驗を語る如き寺院ではない。従つて山修山學した僧によつてこそ、比叡山の宗教活動が現わされるものであつた。特に浄土教の興隆以後、比叡山僧は世の注目をあび、法華經誦持による奇表、あるいは、その往生の相が膾炙されるに至り、説話として大いに語られることになつたのである。もっとも僧の奇表については既に『靈異

『記』において、南都の元興寺、大安寺、興福寺等の僧に關して語られている。しかしながら、『靈異記』に見られる寺々の僧の靈異は、『今昔物語集』に見られる比叡山僧の異表とは、いささか異なる。『今昔物語集』においては、殆んど法華經受持による靈驗、及び淨土往生に關して語られているが、『靈異記』における僧の奇特は、例えば慈應は火難に遭つた漁夫を咒によつて救うのであり（上巻第十一）、また下毛野寺の諦鏡は、暴行をうけたが、その呪によつて暴行者を死なしめた（中巻第卅五）という如く、陀羅尼の呪驗力によつて靈異を示すのである。このような『靈異記』における南都寺院の僧の行業と、『今昔物語集』における比叡山僧の行業の違いは、また、『靈異記』において最も数多く出るのが元興寺であつたのに対し、『今昔物語集』においては比叡山であるということとともに、兩説話集成立の年代差と、その間における平安時代仏教展開の跡を、如実に示しているといえる。

ところで、『今昔物語集』において、比叡山に次いで数多く登場するのは、実は興福寺、藥師寺、元興寺、東大寺、大安寺等の南都諸大寺なのである。これはむしろ意外といえるが、例えば興福寺は、『靈異記』では二話に登場したのみであつたが、『今昔』においては一話だけ引用さ

れ、新たに九話となっており、藥師寺、東大寺も『靈異記』には僅かに一話のみであつたのに対し、『今昔』では藥師寺九話、東大寺七話に登場してくる。『大安寺』、『元興寺』は、既に『靈異記』に多く出ており、大安寺六話、元興寺八話で、『今昔』にも、そのうち大安寺四話、元興寺五話がひきつがれているが、新たに大安寺に四話、元興寺に五話が加わっている。このような説話の数は兩説話の規模にかかわることで比較すべきことでないかもしれない。問題は説話で語られる内容にあることはいうまでもない。

興福寺についてみると、『靈異記』では、同寺僧行善の觀音信仰による利益譚と（上巻第六）、同じく寺僧永興の体験した狐と犬の報恩譚（下巻第二）に登場してくる。『今昔』では行善の觀音利益譚がうけつがれ、附加されるのは、創建縁起、及び再建をめぐる靈異譚、さらに、維摩會、涅槃會に關して語られ、あとは寺僧に關して登場する。藥師寺については、『靈異記』には寺僧長義の金剛般若經誦誦により開眼した話のみであつたが、『今昔』では、草創縁起譚、及び火災並びに再建時の靈異譚、最勝會、万燈會縁起譚、最勝會勅使の靈異譚、同寺舞人の念仏靈異譚のほか、寺僧濟源の往生譚が語られる。大安寺は、釈迦像靈驗譚、及び寺の修多羅供錢をめぐるうけた寺僧弁宗の觀音利益

譚が『靈異記』からうけつがれ、新たに草創縁起譚、石清水放生会に關して寺僧行教の八幡神勧請のこと、寺僧蓮藏の法華經受持による靈驗譚、別当一族の仏物欺用による罪報譚が加わる。元興寺については道場法師の孫女の強力譚二話ほか三話が『靈異記』からひかれ、別に草創縁起譚、寺僧智光頼光及び隆海の往生話、寺僧蓮尊の法華經受持による靈驗譚について語られる。

上述の如き『今昔物語集』における南都諸大寺の語られ方は、天台、真言兩宗開立後の平安仏教展開における南都寺院の動向を示すものとして興味ぶかく見られる。天台、真言開宗によって南都諸大寺は、当然それに対応を見せ、興福寺賢璟、修円、元興寺護命、仲繼、明詮らによって、法相教学が興隆された。薬師寺最勝会が仲繼によって起され、興福寺維摩会とともに三会の一として勅会に認められ、あるいは空海と修円が法力を競い合ったという説話がなされるのも、そうした歴史事情によるものであらう。しかし、平安中期に及び、律令体制が衰退してくるとともに、南都官大寺の経済的基盤はくずれ、窮乏するに到った。諸大寺のうちでも藤原氏の氏寺である興福寺は、藤原氏という強力な外護者によって却って繁栄したが、外護者としての貴族と、特に関連をもたない大安寺や元興寺は、

著るしく衰微し、従って、その宗教活動も自ら変化を来さざるを得なくなる。奈良時代には国家仏教の中心的位置を占めていた東大寺も、「封戸庄園元是雖数多、頃年以来次第停廢、云仏事云修造、已及闕如^④」という状態であったのである。大安寺においても、嘗て聖武天皇の勅許をえて道慈の始めた大般若会は、重要な護国法会として、東大寺華嚴会、興福寺維摩会、薬師寺最勝会等とともに『延喜玄蕃式』にも定められ、また、『三宝絵図』にも由緒について語られていたが、『今昔物語集』においては、もはや語られていないということなども、同じ様な事情によるものであらう。官に代る外護者としての貴族にたよろうとするためには、貴族たちの求める密教修法を積極的に取り入れる必要があった。かつては三論教学の中心であった大安寺も、次第に密教化を余儀なくされるとともに、一方、天台浄土教興隆の影響をうけざるをえなかった。大江親通が保延六年巡礼参詣した大安寺金堂には、中尊釈迦像の東に、伝教大師御仏という弥陀三尊、西に弘法大師御仏という等身千手観音が安置されていたという。この様な状況の中では、本寺を離れ、山林山寺に練行、あるいは民間に止住して法華經を誦持する持経者や、浄土往生を願い念仏を唱ずる念仏僧となる者も輩出することともなう。即ち、そこ

に『今昔物語集』に見える如く、大安寺僧蓮藏、元興寺僧蓮尊、東大寺僧仁鏡等の法華持経者、元興寺僧隆海、東大寺僧藏満、明祐らの念仏往生者が語られることとなると考えられる。大安寺丈六釈迦の靈驗は、既に『靈異記』に二話語られ、『今昔物語集』にもうけつがれているが、『今昔』において新たに集録された大安寺の説話は、も早や釈迦の新らしい靈驗を語ってはならず、時代の関心である持経僧、念仏往生僧について語ることとなるのである。元興寺も、嘉祥、仁寿の頃の撰と推定される『日本感靈録』によれば、中門四天王像の靈驗譚が七話語られているのであるが、『今昔物語集』においては、中門二天夜叉の靈驗として一話(卷十七の第五十話)語られているにすぎない。この中門二天夜叉は、嘉承元年とみられる大江親通の『七大寺日記』に、その形像について、「言語道断也」などと言っているが、四天王として尊崇されていたものが、何故か二天にのみ対象が限られてしまっている。その信仰の内容については、説話の後半が欠文のため明らかでないが、そこにまた、元興寺の変転を伺いしられるといえる。元興寺の変転ということについては、『今昔物語集』卷十一の第十五話に、「元明天皇始造元興寺語」として留意すべき説話を示している。その概要をいえば、本尊弥勒菩薩像は、

もと東天竺の長元王が作ったものを新羅王が伝え、三伝して我が国に将来されたものであるという由来を記し、その後、寺運隆盛であったが、一人の非性の荒唐が、弥勒像の本願である長元王の忌日を廃止し、反対する僧を追放してしまった。そのため元興寺は以後衰退したのであると語っている。この説話は、先節でふれた如く、何に原拠して構成されたものか明らかでないが、恐らく本来、本尊弥勒像の縁起譚であつたと思われ、それに元興寺の衰退を歎く人々によって衰退理由が布衍され語られるに至つたものであらう。上述の説話の語る元興寺衰退理由が事実であつたかどうかはともかく、元興寺の衰退、荒廢は、長元八年の『堂舎損色檢録帳』^⑦に、よく示されており、また、説話に、非性の僧に追われた僧が東大寺に移つたため、東大寺と不和になり合戦にまで及んだといっているのも、大治元年に、東大寺寛信が、元興寺別当となつて復興につとめており、東大寺の配下になつたことから語られたものと思われる。ともかく、平安後期における元興寺の実情を示して余りあるといえよう。

五

上來、『今昔物語集』にあらわれた寺院について、いさ

さか考察をめぐらせてきたが、尚、留意されることがないわけではない、例えば、四円寺ほかの皇室、貴族の御願寺が、説話にあまり登場しないことである。『今昔物語集』編者の宗教的立場によるものかと考えられるが、なお考えてみねばならぬことと思われる。

註

- ① 速水侑「平安時代における観音信仰の変質―六観音信仰の成立と展開―」(『史学雑誌』71の7、昭和41年)。
- ② 持経者については、佐々木孝正「本朝法華験記にあらわれた持経者について」に詳しい。(『大谷史学』第11号、昭和40年)。
- ③ 『今昔物語集』卷十四の第四十話。
- ④ 久安三年五月十六日官宣旨案(『平安遺文』二二八二号)。
- ⑤ 『七大寺巡礼私記』元興寺条。
- ⑥ 松浦貞俊「日本感霊録の研究」(『東洋大学紀要』第五輯、昭和二八年)による。
- ⑦ 「東大寺檢損色帳」(『平安遺文』五五一号)。

大谷大学図書館

第三和漢書分類目録

第一分冊 B5判 横2段組 728頁
定 価 7,000円

第一門 ・ 仏教通記

第二門 ・ 各宗別記

第三門 ・ 真 宗

昭和7年8月～昭和40年3月増加

昭和42年6月発行

申込所 大谷大学図書館

京都市北区小山上総町
振替(京都)21783番